

13日は父の月命日。仕事が予想外に長引き、私は雪がしんしんと降る中、小走りで花屋に向かった。必ず命日には花を買いたい。

途中、携帯で時間を確認した。「閉店までに間に合いそうだ」。

ただ、花屋には着いたがそのとき小銭入れがないことに気づいた。確かに小銭入れはポケットに入れた。間違いない。落としたのは携帯を出したときだ。慌てて戻る。街灯は薄暗く、よく見えない。中身は五百円のみだが金額は関係ない。その小銭入れは父の出張土産で赤のリボンが目立ち私には派手だったが、普段お土産など買わない父が頑張ってくれたと想像すると嬉しくて気に入っていた。

しばらくすると、60歳くらいの人が「大丈夫ですか」と声をかけてくれた。事情を言うと、「それは大変ですね」と一緒に探してくれた。雪は一向に止まない。

「すみません」と言うと「もうすぐ見つかりますよ」と優しい声で答えてくれた。30分程たち罪悪感でいっぱいのは、自分が探し続けるとその方も帰りにくいだろうと思い「もう十分です帰りましょう。本当にありがとうございました」と言って別れた。

その数分後、誰もいないことを確認し、もう一度探し始めた。辛いとき、これを持っているだけで父がいつも側で応援してくれているような力強い気持ちになれる。私は涙を堪え探し続けた。

すると、さっきの人が懐中電灯をもってまた来てくれた。「いると思った。やっぱり」と笑顔で照らしてくれる。「これだけ必死に探すんだから、素敵なお父さんだったんだね」。懐中電灯に照らされ、小銭入れは見つかった。嬉しくて涙が出た。「ありがとうございました」と何度も言い、お礼をしたいと言うと「こちらこそ、ありがとう」と言う。「俺も娘がいたんだ。娘と話しているみたいだった」と微笑み名前も言わず去った。

私は小銭入れを握りしめ「あの人は父さんが出会わせてくれた人だ」と思い、心の中で何度も何度も「ありがとう」と繰り返した。